

壁なくムラなく抜かりなく

第94回薬剤師国家試験の合格率は74.40%である。93回の76.14%、92回の75.58%、91回の74.25%から比べると、一見いつも通りの合格率と思われるが、ここ10年の国家試験の中では、2番目に低い合格率である。最も低いのが91回の74.25%であるから、今回の合格率は、ここ10年で最も低い合格率と大差ないということになる。受験者数は、昨年同様増加しており、新卒受験者数は1万0733人。93回新卒受験者数1万0025人に対しては約700人増、92回の8791人に比べると約2000人増となっている。これは、ご存知のように新設された薬学部の新卒生が、受験に加わったことによる結果である。受験者数増加は、その他受験者にも当てはまる

(その他受験者の内訳は様々であるが、既卒がその大部分を占めていると考えることができる)。新設薬学部の既卒受験者が加わったことも理由の1つであるが、やはり6年制の国家試験の前に4年制既卒者が、「今のうちに合格しておかなければ……」といった理由から受験したという背景があることも間違いないだろう。その他受験者数4456人に対し、合格率は49.26%。以前はその他合格率が50%を超える場合もしばしば見受けられたが、91回で38.67%と極端に低迷してからは、92回の49.05%、93回の48.96%と50%を切るパターンが続いている。ここ数回の国家試験同様、既卒の方にとっては苦戦を強いられる試験となった。

第94回薬剤師国試を振り返る

総合判断では今回の国試の難易度は中程度。過去問題をしっかりと理解していれば、合格ラインに達する内容であった。開けてみれば、ここ数年の出題傾向を十分に踏まえた形での国試となったわけである。過去問題で問われている内容を、しっかりと理解しておくことは、試験対策の要である。

理解さえしていれば、どのような問われ方をしても対応することはできるし、どこでどう出題されようが慌てる必要もない。「こうきたら、こう答える」といった、一方向だけの“偏ったムラのある知識”や“表面だけを覚えた知識”では、到底国試に太刀打ちできるはずなどない。ましてや「これは医療の内容なのに、基礎で出題されるなんて!」ということ慌ててしまうようでは話にならない。

昨今の国家試験は、科目間の壁がなくなってきた。多岐にわたる出題に対応できる、幅広い理解が必要とされているのだ。そういったことも踏まえ、過去問題をきちんと理解していた人間ならば、今回の試験でどのように出題されていようとも、どこで出題されていようとも「あのことを知っているんだ」と容易に解くことができたはずである。当然、易しいと感じるであろうし、容易に得点できたであろう。

しかし、理解が伴わない偏った知識では、こうはいかない。ちょっと違う出題のされ方をすると「何コレ?こんな知らない!」となってしまう。表が黒いヒラメを、ひっくり返して白い方を見せただけで「何、この魚?見たこともない」となってしまう。(本人にとっては)見たこともなければ、知りもしない問題なのだから、さぞかし難しい問題に見えたことであろう。さらに、「医療の問題が基礎で出題されている!」などと慌ててしま

うようでは、自分で勝手に難易度を上げているようなものである。そんな状況で好成績をとっても、それは難しい話であろう。

国試対策に求められるのは ①どこで何を聞かれても答えることができる“壁なく”②

基礎薬学

有機化学、放射化学、機能形態は例年よりやや易しいか、例年通り。いずれも過去問題の内容を把握していれば解ける問題か、分析化学のように深い内容が問われていても、選択肢から答を導き出すことができる問題であるため、難易度的には高くない。物理化学の計算問題は難易度が高い。後述する医療でも計算問題が出されており、今回の国試は、いつもより計算問題が多い試験となっている。計算嫌いの受験生にとっては、やり難い試験となったことだろう。

生化学に関しては、あまり触れられないような内容が出題(問42:アミノ酸の先天性代謝異常、問43:ATP産生阻害物質)されていたり、選択肢から答えを導き出せない問題が多く、さらに医療と関連している問題があるなど難易度は高い。分子生物学も難易度が高く、選択肢からも答えが導き出せないが、例年に比べ問題数が極端に少なくなっている。

衛生薬学

衛生薬学は、易しい問題と難しい問題の差が極端であるが、総合的に難易度は中程度。ここ数年話題になっているものが出題されているのは、今回も例外ではなかった。食の安全、食事摂取、ヒートアイランド現象、HIV、手足口病等が出題されている。ただ、いつもより構造式に関する問題が多く、やり難い受験生も多かったのではないかと。問73の「原因・動機別自殺者数」の問題に面食らったのは、受験生だけではないはずである。

薬事関係法規・制度

法規に関しては文章でのひねりがなく、問題の言葉が平素で易しい。法改正に関わる部分は避けて出題されているため、基礎力さえ

どの方向から、どう問われても対応できる“ムラなく”③「こんなもんかな」と自分でラインを引くのではなく、1つでもいいから覚えること、少しでも分からないことをなくしていくことを怠らない“抜かりなく”——の3つである。この3つを精励格勤することが、国試対策の常道であることは、今も昔も変わらないのである。

身に付けていけば高得点が期待できる。

薬理学に関しては、今までとは異なった観点から問う問題が多いが、しっかりと理解していれば十分対応できる。ただし、表面的に覚えているだけで解けるほど易しくはない。

製剤学に関しては例年並みで、特に難しい問題はない。

医療系としては、いつもより計算問題が多く出題(物理薬理学、薬物動態学、病院実学)されており、難易度も低くはない。計算問題の得意不得意がポイントになってくる。

今回の国試の最大注目問題は問211であろう。この問題が今回の話題を総なめしたと言っても、決して過言ではないはずである。臨床で実際に起きた医療過誤が問題として出題されている。「look-alike drugs:見た目が似ている薬剤」「sound-alike drugs:名称が似ている薬剤」に関する問題であり、内容的には難しくはないが、商品名が国試問題として出題されるということに関して、これも面食らったのは受験生だけではないはずである。

病院実学に関しては、年々難しくなってきたが、今年度は昨年並み。ただし、前述のような臨床業務を視野に入れての出題となっており、試験というよりは「薬剤師として知っておかなければならない知識」を問う問題が多い。臨床的な考え方・見識がベースになってきていることは、言うまでもない。

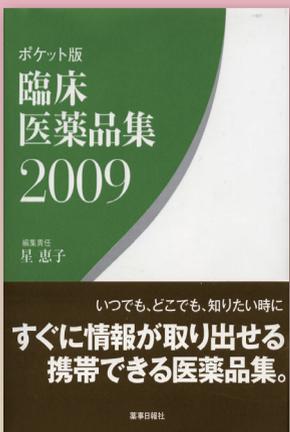
医療の午後では、疾病と治療の長文問題が最初の方に問われており、面食らった受験者もいるのではないかと。例年通り問題を読み解く力が必要である。しかし、いずれも、過去問題の内容を把握していれば解ける問題であり、難易度的には高くない。

医療薬学

大幅に見やすくなり、内容もグレードアップ!!

ポケット版 臨床医薬品集 2009

好評発売中



編集責任 星 恵子 (昭和薬科大学薬物治療学教授、聖マリアンナ医科大学難治研客員教授)

A6判(ポケットサイズ)2色刷り 1,046頁 定価4,200円(税込)

薬事日報社 http://www.yakuji.co.jp 書籍注文専用 FAX 03-3866-8408